日々業務記　十二月

日本紀略抄巻之七

十二月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

朝日殿乃代ニ建無代月と称す

殿の西月元日なり四位ニ代日と乙ゑ朝日と云又七ゑ
ひとしてゑと繁く行事ひろ乃時ひろ
まりし事ゑやされい一年乃月事ゑ朝日と重く
やそ人ゑ事ゑしる事と称ふ

八日をろこうして臘八と云今日竈とあがめ家内を
へ〜宝財記に十二月八日粥を作り竈神と行業
業を竈とさつるゆゑをろこうの風俗なり
物を洗ふ風俗無之額氏家訓に黍と云をかたち
祝融なり祝て祝融と竈神とすなり〜又藤車記に
こゝにては祝融と竈神とすなり〜又藤車記に
毎年庚申庚午庚辰神を今乃人代を竈
神なりとあり是たこれをれいち我国の竈神と
○今日水と酒を壺に入婚重〜教人方に
臘中腐水来年治一切疫病裏飲食臘八日水

龍神なりとあり
十五日釈迦佛涅槃日なり破邪論に周穆王五十二
年二月十五日佛涅槃とあり周代を十二月として
家方とす唐に二月ハ今代十二月なり唐代今世二月
十五日とつく佛滅日とすなをあやまれり
○上旬或中旬の中臘月の節よりのく多く来と春初
所へてゆく四月の用とをしもろこしにも冬春来
ゆく臘日に来と春ゆく事事なりとなん
花王院国楽庵序曰金馬石湖絳雪来四季の観賞
十支採其年年の歳月一侍小歳に限土産一冬春紅臘日

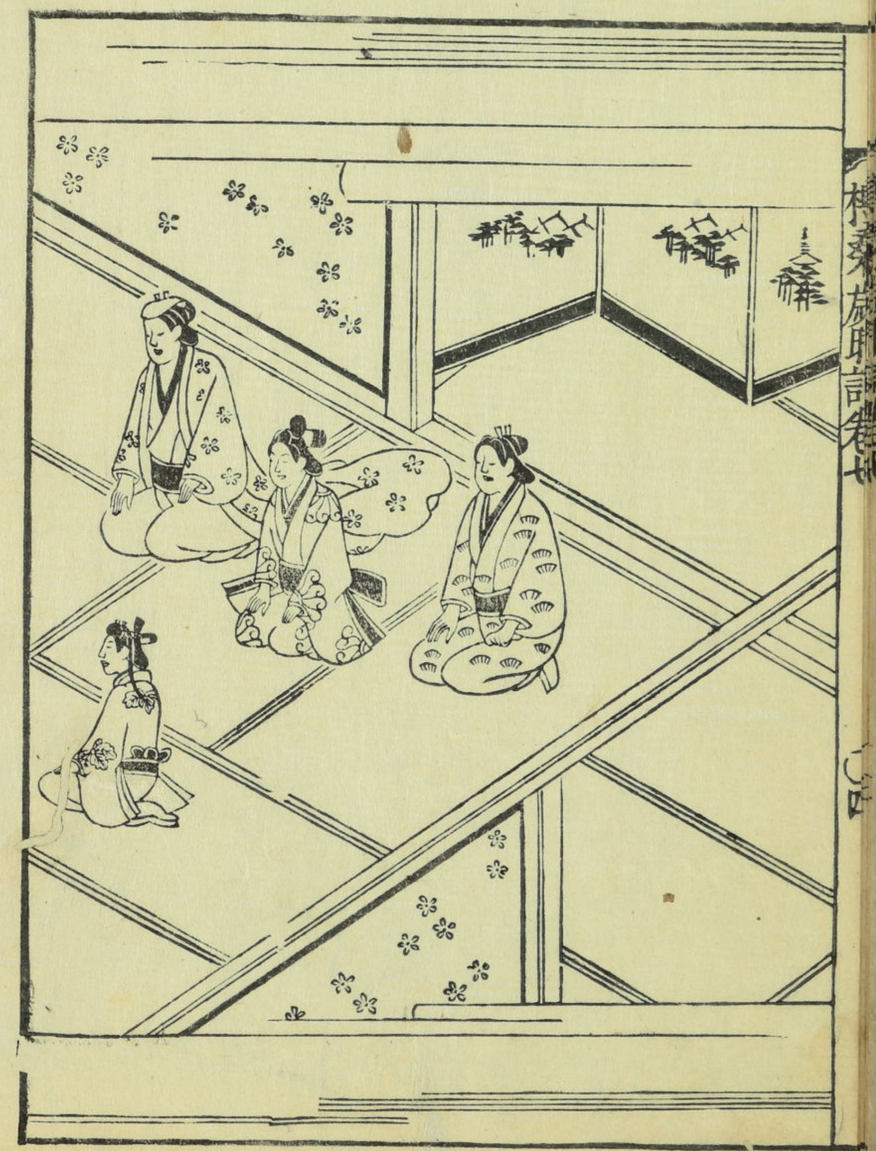
春雨霖霖一家閑多聚杯盤腕中暴事。義之土
瓶金甲縁年石壁名冬春衆 出年事 文勢象

○十五日此後屋中の煤塵を掃へし煤塵を掃に
世人多く到日と定て慌忙すと雖も風雨此
思い到日に掃へすと雖も日の風雨なき時と用へ
風書を濯志を引て臘月廿四日毎家掃塵也
あ思い中寿ゆ寿ゆ完又到日の掃と云
二十日 世り歳乃ゆと云ひ 国俗廿月中旬より後毛小絳縫
みく面と出るひ又絳縫みく膝と敷ひ烏帽子を
せきぞろとひて出るくの祝詞とうひ舞なり

くるあり世にくるとハ第手まいとうみをとり
都鄙共ゆまと所事なり
○下旬此間親戚ゆ送物して贈答と賀す又者れの
所此鰯寒鰤猪鹿等此者此者ゆ親方に送て財
物と賜へ人〳〵或親ゆ聟ゆ嫁ゆ娘ゆ人師傅と為ゆ
人親方及ゆ人の病と療せ醫師なと子を多り
送ゆあつく物ととて謝礼なるへうゆ此ゆ
ゆ物くせんゆ家くせんとうゆひて送〳〵かく書
送へ〳〵鄙者なるへうゆ元鄙者なれへ神義祭れ
すん偏とあつく〳〵国務とめくも事なゆ財と

さしをそらりにたくちへてうりて字れりきりひくなら
そのまゝり字をけしてとよく王れなもんまうへし
風土紀曰。呉蜀風俗歳晩相與餽問之謂之餽歳。又蘇子瞻
餽歳詩曰。大功各已收。歳事得相佐。為歡恐無及。
假物不論貨。山川隨出産。貧富稱小大。置盤巨鯉横。
發籠雙兔臥。富人事華靡。綵繡光翻座。貧者愧不
能。微摯出春磨。官居故人少。里巷佳節過。亦欲舉郷
風。獨唱無人和。これをもて見れハ市中毎年も歳暮に
物を親戚に贈ることなるることえてうり
〇又下旬比内年忘とて父母兄弟親戚を饗する事

なりこれ一とせ乃万事なくすぎし事を祝ふことなるへし
蘇子瞻別歳詩曰。故人適千里。臨別尚遲々。人行猶
可復。歳行那可追。問歳安所之。遠在天一涯。已逐
東流水。赴海歸無時。東鄰酒初熟。西舎彘亦肥。且為
一日歡。慰此窮年悲。勿嗟舊歳別。行與新歳辭。去
去勿回顧。還君老與衰　按するに此詩の序に蜀俗歳晩人酒食相邀呼為別歳と有り　[illegible]
ひとしく又郷邦代酔編によりて滙人某書宴集
取濁數此等の説を考へ見れハ去年のとしを忘
るゝなるへし
乃俗なり



○此月下の午の日掘り出して上腐をぬけるを取
製して一包をもちゐ一年の百第より病門あるを
煎にかへて焼その灰を篩に入て粉末にする
二十六七日 此鶴と製すべし甘味なるを善とす
よのつい大麦の節の間より別に穂を作り今日の年期
に用ひるのを製すべし脆弱にして穂を製する事は味
美にして久しく堪へ其性和なるゆへ薬初より
用ひる日数多く歴て古墨破たるゆへ薬すべく
次に大麦此間より製して其の墨より水漬
い者にやりうちゆり元穂を製するよりふくを活氣

ありの実より実とり又いかのいかりさよ酒かい
の型に成すべしたゝひ初一てひ酒よりれ温に成く
能れるに用ひ入てくなりて酒氣なりとひ
て実と用れい能ゆるを煮れいなりれて用
にたすべつゝして酒よりれて実と用へす
磨酒のごく搗米と製をるを醫書にをかて俗
ゆとしかく高くく能れ酒とこへをといい物ばりに
此ちゝと能ひをく走れる赤米伊勢

二十八日 屠蘇と合製へし

○醫林集要屠蘇方 大黄 山椒 桔梗 附桂 防風

各五分 烏頭 白朮 藜蘆 各一分 右八味剉三絳囊に
入り深日に井中に懸め元旦に取り出し
裏たる酒に浸し漬て藜蘆に井中にまで
に裏を井中にまで元と服す当年瘧疫と
不病 藜蘆 山茱萸乃事なり日本にもあれども
性やとれり中毒多し用ひ難し 他方也 赤朮 桂心 各七分 五分
○又方 本草綱目にいく陳延之小品方云 藜蘆 元旦 元旦の時 疫癘一切不正之氣
防風 一両 藜蘆 五分 蜀椒 桔梗 大黄 各五分 七分 烏頭 二分五分
赤小豆 十四枚 三箇乃絳囊にこれとのこの右
如此 赤小豆は蓼ホなり 桂心と肉桂の皮なり
○又方 出千月令廣義 大黄 一分 藜蘆 去皮各 一分五分 川椒 白朮

桂心 各一分 烏頭 炮去皮脚 一分 吳茱萸 二分 防風 去芦 一両
○本朝屠蘇方 白朮 桔梗 山椒 防風 各一両 肉桂 五分
大黄 二分半
○白散方 白朮 桔梗 細辛 各一分
○瘧瘴散方 麻黄 今麻 一分 山椒 細辛 防風 桔梗 藜蘆
白朮 肉桂 各五分 已上三方典藥頭兼安信濃方也
○正月元日用之 雲法元日 條下に詳なり
晦日 又法日 沐浴 晩食後 士元元中よりて衆薬を煮て国家安
長命延年 庶人は正月朔旦の家

法を設すべし

○屋中及宅中を掃除し門松を立て戸口に
注連縄を掛くべし（屋敷の内に明らかにして松竹を立つる
乃ち門口に外なる人ゆつり葉を立ざれと雷を傳
伝ふるなり）

○今朝と除夕とに又除夕と云ふ一年の始りの朝
五穀を炊くこと元旦に雑煮と生魚酒食と生魚
乃至最初に食べ三つ酒食と食べ中人奴婢にも
酒食を食べて世と事なく雑煮を食べ歌舞し
年中に長とまちの翁と云ふ翁を迎へ
周家の風を花ふいろく除夕に生魚を幼聚供祭

頭の数個に元旦の分家けり一年の終り初まれいのく
ふ人を事なりと云ふ仏前に今朝なに人のくる者と
毎朝まつるなりと云ふ新年の月を使用を人に付す
と云ふ屠蘇の方は天保年代作用を人に付す
○今朝は床に九上及庭下竈に香を焚く除邪祛
陰宜爵氣助陽法又外に焼と焼し豆を以て彩
所に焼と焼し惜る炭彩多く焼く歩中安明
に毎陽氣を助へし又七日を最も氣と和順な
き下人と雪罵るなれ怒と怒して氣と傷
事なり也戒解して祝と拝する事なり也法慰

左衛門尉義貞と月令廣義とは乃ち
○今年中一家に用行きまと正氏業と今多年惹
禁い疫氣と逆と回時蔓延に乃ち又今多餘
ホと多く禁い疫氣と逆て生編よりあり
○伝ふ聞く今冬儀豆とうつし（儀豆とうつる意乃ち花乃ち人行きと
賀年乃ち追儀も十二月晦日のうちに乃ち行乃ち
今吾隆家進儀と行ふ三六今冬ハ氏事とかしこし）
と儀豆とうつして逆鬼と為せぐる年世張問答す
出でひと逆鬼乃ち夜叉ろ放よ禁年ホをむしハ
治陽寮さいをんとよりて上に以下出て地に回員
ありうく地ろろ乃ち面とうくもよみて

れことりつく回義氏ほつとまりあり又殿
上人なと御殿のうちよりて地乃ち葬乃ち矢ふく
いとふ出ふとうこうりて豆うちて鬼とも
ふうもうしまれるやと見て（鬼と為す 後日本紀より）
文武帝 文武帝三年天下位国疫疫百姓多死 又 鬼の
始 他三年大儀すと 伝りこれをのたまる又
奥傳ありて石清水 善源通の命よ宮氏宿乃ち
豆腐 豆腐と豆とうて二所乃ち鬼おく都よりいくさ（鬼）
海乃ち波ぎ乃ち波ぎ乃ち波ぎとうて氏弥南宮乃ち
帝に奏しくれいは法西よ伝きくまてく回千九
乃ち地とうて宮よ乃ち宛と鬼一石三斗九と

いろく鬼氏目とうちゝよ埃裏物ゝ志所
物の毛不穢の毒俗なりかゝ所毒徳乃仮とも
ろ氏毛他とかゝそゝんを出行ゝそれいやこぬされい
備を疫とおいろゝふてゝなり驚乃やうなきこを
用徳物乳他偏徳みをのせそれより後世氏
徳偏志ゝ志ろゝ志ゝ物ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ
衡の東京賦ゝ伴なり又氏薬赤九ゝ穀とます
ろゝさすゝろ漢洋書乃法ゝ刀ゝえゝろ穀乃
中に志ゝ毒ハ今　國俗ゝ豆ゝつを竹ゝ号ゝ風ゝ
やおにやゝひとハ鬼と知ゝゝゝ義なり源氏物語ゝ志やゝと得も
俗とやらゝゝいゝゝなり志ゝふとハ進とゝゝなり物ゝゝ氏ゝ

志ゝろ志ゝぬ人ハまるこゝろゝ角ありて佛書ゝゝろ疫鬼のゝゝお
そろゝゝ志ゝ形ゝろ和ゝろ志ゝ所ゝ氏ゝ志ゝ法氏家
と形ゝ志ゝ法邪乃毒毒と志ゝて志ゝ法邪乃氣毒疫毒ゝゝ人
をろゝこゝゝ物ゝ毒ハ志ゝ氏ゝ志ゝ法陽ハ二分ゝゝ
ろゝ志ゝ物ゝろゝ氏ゝ志ゝ法の口ゝとゝ湯ゝ志ゝ法邪なり陽毒
毒なり法毒毒なり氏ゝ湯とゝろゝ氏ゝ法とゝやゝむ法邪なり

又　國俗毒とゝうゝは鬼毒ゝろゝ毒ゝ獅ゝろゝうゝ毒ゝ
なり物ゝ毒ゝ法ゝ古人乃法ゝ法毒氏毒ゝ毒ゝ孫ゝ毒ゝ
時年作ゝ毒ゝ物ゝ抛擲ゝ打ゝ毒法方鬼眼精ゝ行ゝこれ
大毒ゝ投ゝ毒ゝ鬼氏眼ゝうゝうゝ毒ゝ毒ゝ形ゝ怪ゝ
古毒ゝ毒ゝ志ゝうゝものゝうゝ毒ゝ乃毒の鬼ゝ

鬼ゝうゝ毒ゝ古ゝ氏ゝうゝ毒ゝ氏ゝうゝ毒ゝ氏ゝうゝ毒ゝ氏ゝうゝ毒ゝ氏ゝ

○今ハいゝゝゝのかゝら大戦ゝ所ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ

鬼ノ人ヒとらんとあせく鄰ちかくすむ故
裏物に見えられこれ又高徳の張る事ハ作風
とるにてすこしの土作見れよりかなら
られい上ヒの法をいそうまいあるこれしも
こ乃書ハ桃符畫繪屏風帳ヒなる作りこれ
四鬼と書せく去てきのふ三人ハれいその影のくし
○屠蘇と今日より井の中に投し重し一番ハ家より
濁酒ハ奇ノ清酒乃法ハ
一桃葉酒に蜀椒望月新年上製酒呂恐梅花
明日老松餅お雑煮如意

又高遠ノ作ハ
旅服を能ク脱ぎ眠宅ハ何事ぞ特濁酒友郷今宵
思不果秋髪明朝又一年

又方秋庭ノ
夏ハ橘紀把一枝酔紫帳字等春身須臾便是
明年事蜀酒一杯一俳風

又玉潤ノ
今宵ハ何事ぞ明年ハ日俗ぞ浪一杯去春酉二五
夏ハ氣色六年沒宿新暗意俗風老人不覚已
年後園梅一

古今集の喜選別樹

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

何事と[illegible]

又歌

[illegible]

①[illegible]貌の形と圖[illegible]

て今の世俗[illegible]

[illegible]なり[illegible]これを用ゐ[illegible]

掬と面の貌を爾雅に中ち洪洞及竹とて[illegible]

唐代[illegible]の貌屏の賛代席[illegible]

犀自牛尾虎皮[illegible]

俗形之白澤[illegible]

脇外之[illegible]

[illegible]

[illegible]

書よ大儀乃時他者とゝ乃邪食愛ゝ云ゝ乃ゆり
ゆゑ後世もさるせり　されども経の事ゝ乃ゆゑ腸中乃
異類にして形ゆゑ乃ゆゑ　ねいこれと食てゆるを
こゝろ方に事ゆゑ乃元世伝に人書に食ゝ食ゝ
と禁せり一日に西平後方にして正し
うゝぬるゆゑなり　かくゝ乃ゆゑ乃西幽
乃事ゆゑ乃いう主人ゆゑ乃て巫伝ゆゑ　てゝ
乃とまぬうまんゝと彼ゆゑ乃なりまざして
世乃古人乃言ゆゑ癡人の面ゆゑ乃ゆゑ　後へ
うゝゑゝゆゑ乃そゝ　元弟に乃八周に乃
乃古義乃ゆゑ

乃後東坡の夢奇聞歌序。巻末
乃茅の義乃後乃考乃ゆゑ

○又と薬乃永と書く禱乃ゆゑ藥ゆゑ乃ゆゑ　これ韓退
之に送窮文ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ人を乃主と乃欲
に没ゝ乃ゆゑ世伝の面主ゆゑ乃ゆゑ　ば乃ゆゑ乃ゆゑ
面ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ
乃ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ
如ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ
○世伝ゆゑ主人ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ
よゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ
主ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ

御堂の御ぶつよ多し　鄙おとこ多し

これらの婦人女子のたぐひまでもすべて丈夫のすべき事をなすべき元世俗より尾張にて男女とも年数よりとく成寅ばかりしかなる事なしむ

年あり此年よりあるひは神よりあるひは仏おもてうれ寅とまぬるきん事とりむ僧巫乃ともがらこれと幸として民乃財をつむるなる事なり俗されと此事ハ筆乃書ハ足て次日本の紀ふるきぶいむりしるされ海ばたなるあらしやゆ俗間紀よ大ふれ年世為無事と云

大ふれ年ハ六年七年より九歳と加えた十一年よりまくといり七歳十六年二十四年三十四年三年五十二年六十一歳なり九年と加えれば九老陽氏数なり陽極れいるゝ家なれ陽なりとは陰よ月人ていう考られとは此年無事とおぼるなり

此年ハ俗の年也無事と世ていうよ陰なり数とも引ようしるし尾年の事をいるるに命俗ハ陰也百猟ようへいの別の約と陰しと善とをいて西とさけば始のつりふれ寅とまぬるへ一多乃約とハ陰しまびてたゞよ神仏よ祈り

或賢人ひとりに拘ひて世をとしうしといふ人
乃吉凶禍福をうれ天命を思いかうそのまことひ
とまぬる事あり人やうに尾年と云ふ事を記す
なるべし作ふ人うしん行ふ人をよく勤ふにこそ
もろこしに孝を乃後弟三の成代日と臘日と号し
此日邪とまつり又吉凶聖賢民を功ふる人とまつる
よ〳〵潅業儀よ之をうり又聖賢典ふい臘い先
船とまつり蟹を百邪と云ふ国にて美味とかり
小豆大豆三十日乃習今世俗ふ宮の中と称す此
百ふ食拍茎拍茎と称す是いあれ性よき有久しく

たくひて拾世に此所称する拍ちは記す
○乾薑と製する法　母薑と宝氏本の条に一七日
乾田又日湯して取あけ皮と去日ふ平炉〳〵
○山葉とうらく炉〳〵する法　此法ふ多くかりたる
年久しき幕類と云ふ細刀して皮と去切へぶ
て米粉とまぶりひけ糸よつぬき清純す鉄と云
○糯米と粳米と海米とする法　一日ふ漬し
一日い乾す如此をする七次許久しく浸せい米氣
ぬきをくあ〳〵糯米い米〳〵て饂飩ち粳米い飯
と粥とうて病人ふ用れい世病とをめ腸胃と補

てん腸よりづまし

○枝米と乾飯よりする法　枝米と多く臼水よりして日
浸し蒸籠にて蒸し瓶よりハ炉壺へ用
ゐ附漿湯よりして世ハ迷よりなる粉をふして腸腸は
ふ塞苦有り藤紙乃附布よりして包てこれと沸湯に
投す世ハ包よりなる乾日風送布清布石の鍋性
○糯米乾飯と為る法　上白乾糯米と常乃
ごく臼乾月の水よりして毎日多と少く二三日色ごく石
臼とごく洗ひて右乾米と磨し多とよりてをいの
にくとと〳〵澤とい再ひ石臼ごく磨して又とす

あるに桶よりハ多と加之一枚ごく清多と去りて
毎日水と換ごく水乾さるまで三日ごく後棉布
の袋よりして乾飯と入こしてあと去桶よりさしてよく
水とと〳〵出す但一袋よりして多く袋ハ入〳〵ごく多られい
多去こし又袋ごく多るこごく多つく去りて
去ごく袋ごく袋ごく多ごく去りて日の乾さて
附又こまりにまりて清平ごく多るよりごく乾さて壷
ハ入こしてごく乾の洩ごくにまし〳〵用乃附ゆ
くこねごく餅こし〳〵漿湯よりして投し〳〵後水よりして浸して
食し蒸籠ごく再蒸て食し又乾ごく蒸の蒸て

くてたくさんとりけるく食物其外より性質油膏を
こゝめ脾胃を強くし事なけて再養て用へし但寒
食氣滯あるもの用へし
○赤小豆と名づくる法　赤小豆と米粉とを等分に養
とりてこれを入こうして去り清水にて洗
年と経久しく出用て色抜せず異月に腐敗の
多く用て色もなくなる所以と養とす
○臓腑ふるく粗と粉に大なるものを二三日ほとくして後水
よいれ又二三日ほとりて乾かし上なる付方米粉と削
去ぐ又臓腑入三日ほし養り附乾かし熱湯に入

熱湯に入れ内ふるく通るかと湯の中に重く乾かし雑
養と次第久しく三日して取出し熱湯に浸して米
粉を表に用四角にてこれを性和の氣
と不塞美久しくとり正月中ハ二三日に一度水
を換へし二月より毎日あるとなるへし上なつき方
米粉を去されい候換し奥あり
○臓ふるくて事なるとなるすべし久しくして換せ候ハ
事なる大豆と養ふるへ大豆を石臼に水を石臼斗入
熱食のお湯よりに為ありまして出と言を後ハ出
乃ちこれ次第よりたくて釜に入れこれを能ふるめて氣

乃潰らかやうにむしあとはやはらかい夕食毎にとけいれ
能に成熟してあるを時々めせとたきあてゝ
丸如し白みくよく洗ひ大抵洗ふこと後に明朝
まで浸してを同し粉いかのようやなとはそれ
如此をれい粉と功とと多く不費して能熟し
豆汁石潰して性甘く味美なり美味と云へ
くたきよく熟せてしめんとされい大豆抜けぬを
てうすにて潰す赤米麹の味噌 赤米麹を白扁豆と一斗
二三年粒アリ
蒸れい味極せす
○白米醬乃製法 大豆を石臼にて挽て浸し

蒸し熟して上白乃米麹去石五升麦麹石入塩三斗
合てよくくうとつき桶に詰め至三年日光に置て
用ひ味極く甘く色白し
○赤米醬と製する法 大豆一斗麹一斗汁糟一斗
米糠一斗塩一斗右一切つき合すちなりぬいいりて
よし此米醬性極く勝れつゝ病人に用てよ
色白甘美と蒸とく能よし
○ぬかみそと製する法 米のぬかとあらてかくこね
弱みて能むして熟し冷と成すて平なる
面に敷つきつゝ乃麹あしぬか一石に塩一斗米

并醤油のごとく入白糖紙つきまぜ丸上け温氣乃強りうとさゝまし桶ゝを瓶まてをはめまぶと
ちゝ重米年貢を丸もし又白ゝへつきてもの
ゝ入重へ

○又法 ぬうとゝるかゝくこと大きゝ丸ゝ常の間
に濃かとゝ丸ゝ桶ゝを瓶ゝくゝ入重十
日許とゝてかゝゝ白糖ゝつきく
ゝきゝと塩ゝとゝ白糖ゝはゝ合せ丸ゝを桶ゝ
てを瓶ゝくを蓋ゝ入ゝ付重ゝ塩いかゝてゝ
ゝきんゝ丸ゝ右丸ゝ法ゝ久ゝきゝとゝて味変せの通

臭ゝ丸良法ゝり腸中に氣滯ゝ食滯ゝ
病人に用ゝ

○屠鯨と塩淹ゝ法 屠鯨ゝ丸毛を焼きて
腸と去洗ゝ丸ゝ毛焼せ丸ゝ丸ゝ腸ゝ塩と一ゝ入
又ゝ丸ゝ腸ゝを濃ゝ行ゝ塩と多くこと入又ゝ丸ゝ塩と
よく付足とつゝきとゝて丸ゝ結合せさうきに丸ゝて
一枚とけゝ塩ゝ丸ゝ丸ゝ紙ゝつゝきとゝ
苞ゝつゝきて濃ゝ丸ゝ法ゝ塩淹ゝ法ゝ
○塩漬鯖の法 海鯖と結ゝ丸ゝ塩と多くはを
桶ゝ入ゝ丸ゝめの如ゝ丸ゝ一ゝ丸ゝ

合せ一度くらひて紙ぬり
又鷹を包て煮るなり
こもに包縄をくるくる
よりもよりて
〇魚を糟漬乃法
一日一夜
麹又清酒
糟に
塩を
紙と
氣と
糟と塩
か入
塩と
魚を
糟に清
塩と

とかもを
乃あくに縄
もに風引
を糟と
塩をと加へ
〇鮭鰤
浸さ
水もの
上とこ
〇鮭大根
塩を
骨を
ぬき
紙を
酒を
水を
皮を

根乃事に糸か縄乃両方を先とあけ小縄にて常(つねき)く
風気霜露をさへぎりて次日程取よりけ置て大寒の
終りまで凡三十日室にさらし立春の日取出して
取れ後ちぬ雨氷せへよくかけ置へし ひらし抽
あく抽出て後にして風味甚佳(よし)
○胡蘿蔔(せりにんじん)乃つけ物を製法へし其法胡蘿蔔の
大なるを取て能洗ひ二三日日に干し其ぬかみそに
つけ置能志まりたる時それに浸漬てよし初より
みそにつけれハ味変(へん)じて酸(す)し久しくたくはへ置す
牛蒡(ごぼう)を又みそにつけまてよし

人乃生気より菓中の虫毒を去らんと人行ひて是を
殺すれハ口舌をただらかし次乃事ハ人乃口ハ虫毒を数片
に切まりて繊月の如くにサカえらりつけ置ること少して換
湯にて数度泡をとれハ毒気(どくき)ありかくのことくにしても性を
うせ次に菊黒の又換し凡虫毒を泡をとらすハ換湯
乃能さるゝく虫毒をひえて後食ふべけ 又換湯に
入へしめしせされハ毒さらす
寒中の雪水を貯置へし雪ハ五穀(ごこく)乃精英(せいえい)臘月に是を
収(おさ)め甕に入置年をたゝ永の地中にうつみてもよし
都て風気れ不侵(きかす)やうにすへし凡臘雪水の効用(こうよう)甚大へ

紙一切乃至疥癬及瘡瘍癤癰等ハ蠱毒辟酒酔疲と
治し目疾とゆゝしこれとゝ酒と併り酢と和れた味
甘美にして久く堪たとへて鮮肉に浸せい夏月に換
世ハ又数百果菓蔬乃種まと浸せい実多くして
豆とませす且りにいさます蓋て古書の疫疫流行
と治むと月令廣義ハ見えたり又いとく臘雪水みく密
含麹とのりに考くに出掛油等ハ表とすれい不出
臘月ハ志めたる香油と焼ハ熱す且い海蛤不入膏
茅に用て神効ありし婦人の改ハ白れい製まく完りて
発生せす多く義く紙巻の用ニ入て作食業ハ

これと用く功他油ハ又臘月の猪脂と都
所て膏茅ハ月令廣義ハ十月より四月まての月にそ
れ乃鍋鑊敏ハとこゝ
一ハ水性よく志く繊生せの強ハ宜中とゆく良す
柳の枝と切て立春ハ於ハ地ハ挿い結ハ根とまと
此月忍冬茎と紙巻とし二れと夏月茅ハ
てのめい癘癤と病す
冬月甚寒して病ハ
冬月ハ於ハ薄く衣ハ寒く冷て凍死し
微氣あるい人ハ冷衣と脱去て常人ハ着て脱

なる衣とをいくつかこれとつゝみてゆ米と炊爨して袋に入んとすれば米ひゆ豆ハ又他の袋ゆ炊爨し乾る米と入て煮すべし或ハたきる竈の下ハ爨所と用ゆるもよしゆゑに別湯よりも自用氣同く後ハ薑湯温酒粥なとを入て保養すべし生ものと温ずして火とをいくあぶる時ハ冷氣と火氣と爭て必発す又雄黄燔術等分と用て書と或ハ眼角に塗てよ幾度塗抹者よ

十一月甲ある物と食べからざるの物

影なり月令廣義ゆいはく猿肉猩猩肉生椒と食べからず

鳥ゆ鶏ゆ果菓と食べからず進と多食べからず

物ハ筋骨と食事なるべし毒書に叢書ゆいはく蟹と食べからず牛肉と食べからず牛肉と食べからず鶏と牛肉と食べからず鶏と牛肉と食べからず

事なるべし進ハ八歳ゆいはく十月の三牛肉と食べ

一他月これと食べハ病と為す

損軒乃筱ゆ雜書の中ハ十二月の食物禁忌

ゆ多し毎月某物と食べハ某病と生ずと

以ゆ注湯ゆの物と食べからず俳ゆ

記す紀元ゆ元と云ふ古代方書にをいまゝ言

さる不法ゆ草にいまゝ載ざるものもゆ多し考

作さうゝ沈と云ふ事ハ今ハ書まゝ雑書ハ沈
たとゝ云ふ事ハ載て人ハ披閲ハ候とゝ云ハ可有ハ
乃人ハ擇くこれと云ふとゝ云ふ事

十二月乃ち候ハ牙一居ハ郷牙二姫妃巣牙三姫妃離ハ
少きハ三候なり牙四雑妃乳牙五伝多属疾牙六
水澤腹堅ハ大きハ三候なり　右一年十二月まとゝて
車八月令及呂氏春秋　七十二候なり七十二候の
淮南子等ゝ云ふ

十二月益夜乃刻数少きハ与沙異反対大きハ与大
異反対之月令廣義

日本紀時記巻之七尾

都鄙祭事記

正月

元日　梦中御節会　○二日　東西京都ハ松囃子　○四日
兎多毋敢洗鞠始　○七日　梦中御節会　異国ハ山矣
才天ハ　茅橋川祓ハ　○八日　十四ヶ之後七日御修法
○十日　西文東ハ十三日　南都ハ経会　○十四　十七
日ハ伊勢ハ山田祓ハ　○十六日　宴会爆竹　嵯峨釈
迦ハ　河内国ハ平野市祭　紀伊国ハ松囃子　○十六日
梦中御節会　諸寺ハ　弥勒寺大般若　嵯峨釈迦堂ハ仏
○十七日　伶人ハ春日ハ　梦中爆竹　○十八日　梦中爆竹　○十九日

八幡疫祭あり　廿五日より法花会　〇廿三日　東山善四郎
釈迦涅槃　〇初寅　鶯鳴あり

二月

朔日　七日より南都西京田中門より二月堂行　〇四日
祈年祭　〇七日　十四日より南都薬の紙　〇九日　十五日
小野釈迦堂より涅槃絵　〇十日　小山麻苑寺祭　〇十九日
涅槃会　堀城大徳松　堂祭　〇国彦山祭　〇十六日　後塔
〇廿日　淀月祭　〇廿二日　天満寺伶人祭　〇廿五日　道明
寺祭　小野天祭御所　〇廿日　吉祥院ふく　八幡ばり　祇園寺府天祭　〇
初卯　大原祭　〇初午　稲荷　吉祥堂　東福寺鐵

法会　釈尊国水乃ち初午祭　〇上巳　春日祭　〇彼岸祭

三月

三日　楚中闘雞　伏見御午　石山祭　栗津祭　土佐
御午　〇又日　一条寺祭　彼岸寺祭　〇六日　一条寺
御祭　今日より十五日より清水大師　〇八日　泉涌寺開山
忌　〇九日　水尾祭　泉涌寺開山忌　〇十日　今宮
安楽祭　〇十一日　吉師舞式分花見　〇十二日　今日より四
日より天台祭　日吉八王の　今日より十四日より善光寺大師
忌　東山永観堂　〇十四日　王生念仏　廿日より　〇十五日　法良祭
武州角田川大念仏　山崎史の祭　〇十八日　長徳寺祭

○十九日 堪餓鬼供 ○廿一日 東青仁如来弘法大師
ゑんまゑ 女房 ○中の午 午の日二つ有時は初の午なり 稲荷の祭出 ゑんま
ゑんま佛 光明寺 ゑんま堂摘 石清水臨時祭

四月

朔日 紀州麻祭 ○二日三日 南都ゑんまの祭 ○四日
廣瀬祭 龍田祭 ○八日 灌佛 ○門前檀壇一無帳 ○
九日 清水地蔵祭 ○十四日 南禅の法事 ○十六日 三
井寺ゑんまの祭 ○十七日 紀州和歌山祭 雑賀踊
日光山東照宮祭 尾州久古屋権現祭 ○廿日 勢
田宮見 ○廿一日 ゑんまの供 ○上卯 稲荷祭 山蔭祭

○上辰 八幡祭 ○上巳 山科祭 紀州名草祭 同堅田祭
○初申 大原祭 平野祭 ○初酉 松尾祭 ○初亥 大原祭
○中子 吉田祭 ○中卯 紀州八幡祭 ○中辰 四日四郎祭
○中巳 久世祭 ○中午 賀茂祭 紀州若の宮祭 ○中
申 賀茂祭 山王日吉祭 山王上祭 ○中酉 賀茂
葵祭 松尾祭 梅宮祭 関白厳望義御参詣 ○中
亥 堪餓祭

五月

朔日 賀茂競馬 ○五日 賀茂競馬
菖蒲祭 鬱 関の御祭祭 ○七日 今宮祭 御出 ○八日

三宅宗○十三日 懺悔会 御祈願 ○十五日 今宮祭 ○廿日
宗像祭 ○廿三日 坂本夜祭 ○廿八日 住吉御田うえ
○晦日 祇園御輿洗

六月

朔日 廿日と富士詣 ○二日 高麗の出拝 八日まで ○五日
祇園会始り初 ○七日 祇園会 今日より十四日と祇園
御旅宝 ○十四日 祇園会 尾州藩参 作蓮藩参
御後新天皇祭 ○十五日 尾州藩参 江戸山王祭 三年に一度
筑前藩参 祇園会 他山参 ○十六日 ○十六日
今日より御りと伊勢参礼 ○十七日 お国貴織法 書る

参 厳島祭 ○十八日 祇園御輿入 ○十九日 四天王寺
御後 ○廿日 新宮作切 ○廿一日 御りと礼の御後
○廿二日 大坂住吉祭 ○廿三日 松尾祭 ○廿五日 能三番
明り 又番 ○廿四日 光宗寺日法 ○廿五日 祇園の出年
墨吾出拝 大坂天満祭 稲荷祭 ○晦日 賀茂祭 ○六月
能 住吉御祭 新屋敷 ○常月市 安藝宮島市 ○

七月

朔日 賀茂後日能 ○六日 小野御手洗 ○七日 少貴社
壇燈拝 高麗市 新宮市 并池坊立花 龍多井夜詣 ○八
尽入 ○八日 文殊会 ○九日 六度法 ○十日 清水寺日法

○十二日 十五日と云ふ祭礼 ○十四日 禁市 ○十
五日 八幡安房の郎 三浦十郎 黄葉施餓鬼 ○十日
より明日と云ふ 山石動子日来 十七日と泉涌寺開帳
帳 ○十六日 さう天 寺山大の字 松の病妙法の字 西加茂義弘
取の火 松の病髭月坊より 紀の参仏坊より 右所々より
聚別 山面参代津と入 ○十七日 葉月来 ○十八日 御堂
宮御出 ○廿日 如意祭 ○廿五日 鶴岡 潮汐踊

八月

朔日 禁市 ○ 宮より御宮上 松尾相撲 和泉国の
村祭 明りまて ○三日 堺天神祭 ○四日 出羽天神祭 数寄

数寄 乳酪宮祭 ○五日 別宮 ○十五日
御市 八幡祭 美濃八幡祭 畑枝祭 八幡放生会 ○十六日
宮祭 大坂江川天花火 廣沢原 江戸隅川八幡
祭 七門祭 海祭 鶴岡若宮祭 ○十八日 御堂祭 葉月
祭 ○廿二日 廣澤寺 ○廿三日 廣澤大宰
府天神祭 ○廿四日 吉田祭 ○彼岸参

九月

日 出羽祭 木幡祭 ○八日 泉涌寺釈迦祭 ○九日 鶴岡祭
中御所祭 鶴岡 鶴岡参宮 大坂生魂祭 鶴岡
宮良大明神祭 肥前の七浦祭 ○十日 下谷祭

大津に行く　五條天神へ　麻呂の宮へ　伏見に行く
○十一日　伏勢太郎　岩御　吉田へ行　伏勢御祓會○十二日
去来へ　○十三日　白川へ　○十五日　宮へ　栗田口へ　法祇園
祭りて三年に一度祭る　河内へ　宇治へ　○十七日　桂川池田へ服部へ行く　○廿日　下京
宇へ　高雄へ　竹田へ　建仁寺門前へ　東へ　八幡へ
の祭　○廿二日　大坂住吉へ　堺へ　浜へ　○廿三日　去来へ　○廿四日　園の祭へ
本願へ　浄土へ　麻布へ　新屋敷へ　○廿五日　天満流滝へ　宇治
田へ　○廿六日　小山へ　○廿七日　桂川清滝へ　○廿八日　嵯峨
五番へ　○廿九日　月次　安義へ　○晦日　安義へ　宿方へ

十月

又日　鳥羽へ　遠方へ　十六日　浄土寺へ　十夜　○六日　菊の展覧
寺法華會　○十日　伏見へ　十六日　長谷へ　○十
二日　日蓮宗へ　○十四日　清水へ　○十五日　松尾へ
平野へ　○十六日　高福寺へ　○十七日　内侍所へ　○廿日　江
戸徳商人へ　四條へ　○廿一日　去来へ　○廿二日　一向宗へ

十一月

八日　ふいごへ　稲荷祭の事　○十二日　市へ　○廿二日　一向宗へ
廿四日　天王寺へ　佛へ　○廿四日　大師講　智恵大師
○廿五日　廿八日　○晦日　宇治へ　○初申　大文字へ　○廿宣　祇園へ

十二月

十五日 八幡安居院 〇廿二日 大徳寺天下の忌 〇十九日 廿日より
栂尾山佛名經 〇晦日 祇薗をけらまつり 此夜の子夜和布刈
乃神事 〇節分 禁裏参詣 吉田参
此外國々の大名古跡ことにおほし 好事之人これを尋ぬべし
遊観名所此外おほしといへども 此中につゞめてあらはすもの也
ならくものそ

新都家中記之

昔貞享五季戊辰三月上澣 雒陽書肆日新堂壽梓